

宮澤賢治における〈流れ〉〈揺らぎ〉

——「修羅」意識をめぐって——

植 田 彩 郁

はじめに

宮澤賢治は短歌、詩、童話、文語詩、書簡などジャンルを超えて〈流れるもの〉〈揺らぐもの〉を描きつづけた。それらは、風に揺らぐ植物、時間の流れ、イギリス海岸と賢治が名付けた北上川を通底する風景の中に登場し、心身への作用、生命を躍動させるもの、自己や他者を〈流れ〉や〈揺らぎ〉の中に投入する働きが確認できる。そして、〈流れ〉〈揺らぎ〉のモチーフは、賢治が生涯こだわりつづけた「修羅」意識を描く場としても多く選ばれている。「修羅」を描いた代表的な作品は、『春と修羅』（大正13・4・20、関根書店）の詩「春と修羅」である。「春と修羅」には、次のような一節がある。

まことのことはうしなはれ／雲はちぎれてそらをとぶ／ああ

宮澤賢治における〈流れ〉〈揺らぎ〉

かがやきの四月の底を／はざしり燃えてゆきさする／おれはひ
とりの修羅なのだ

「春と修羅」では、「まことのことは」を失った修羅の苦悩が描かれていると指摘されてきた。秋枝美保氏¹⁾は、修羅は常に「気層のひかりの底」から「天」を見上げるかたちで視線を据えているが、目に留めるのは、地から天をめざす「しんと天に立つ」「ZYPPRESSEN」の方向性と、雲にからまる「あけびのつる」や「のばらのやぶ」の方向性だとする。修羅の心は、「ZYPPRESSEN」の天をまっすぐに志向する方向性を希求しながら、曲がりくねった「いちめんのいちめんの詠曲模様」と「いかりのがさ」「青さ」でいっぱいである。秋枝氏は、それは自分本来の志向性が、どうしてもまっすぐに伸びて行かず、怒りと媚びへつらう詠曲のねじ曲がった感情の中に流れ出してしまう苦しみであるとす。そのような感情が分

裂した状態の中で、「おれ」は「まことのことば」を失い、自己を修羅と規定するのである。また、見田宗介氏^②は「修羅が矛盾の存在であるということ、したがってまた、苦悩する存在である」、小野隆祥氏^③は「修羅は仏教のいうように悪しき存在であり、克服されるべきであるが、克服するエネルギーが修羅にある」と指摘する。

「修羅」は、言葉自体の出現にかかわらず、「こうありたい」という感情とそれと矛盾する感情の中で苦悩し、分裂していく存在であり、そしてその葛藤にどのように対峙するかが賢治に修羅を自覚させている。それは、自己の生によって他者の生を奪い取る生の両義性への苦悩^④や、恋愛感情を主とする欲望や信仰心との葛藤^⑤として生涯を通じて何度も描かれつづける。そして、その修羅意識を描く場として多く選ばれたのが、〈流れ〉〈揺らぎ〉の中であった。本稿では、従来あまり触れられてこなかった〈流れ〉〈揺らぎ〉のモチーフに着目し、〈流れ〉〈揺らぎ〉への宮澤賢治の執着、それらがどのような場で用いられてきたのか、どのような意味をもって描かれているのか考察していきたい。

一 〈流れ〉への執着

(一) 大正七年・八年の書簡における〈流れ〉

宮澤賢治の〈流れ〉に対する執着が確認できるのは、「波」や

「流れ」、「流転」などが多用されはじめる大正七年以降の書簡からである。

書簡76 大正七月二十七日 保坂嘉内あて

わが成仏の日は山川草木みな成仏する。(略) 実に一切は絶対であり無我であり、空であり無常でありませうが然もその中には数知らぬ流転の衆生を抱含するのです。

流転の中にはみぢめな私の姿も見ます。本統はみぢめではない。食を求めて差し出す乞食の手も実に不可思議の妙用であります。食を求めることはいやしいことか。宇宙みな食を求むるときは之はいやしい尊いを超えたことであります。

書簡83 a 大正七年八月 保坂嘉内あて

みんな流転ではありませんか。速かに速かに複雑に何等の法則を容れる余地もなく、或は明るく時には暗くこの万法の流転よ。わが明滅よ。(傍線部引用者、以下同)

書簡76では「流転」という仏教語を用いて、自己を含めた衆生の生命を迷いの生死をくり返す「流転」の中に見出している。書簡83 aでは、「万法の流転」という言葉で、流転する大きな生命の流れについて述べている。大正八年になると、友人の保坂あての書簡中で、絶え間なく変化していく生が、「流転」ではなく、「流れ」という言葉を用いて多用されるようになる。

書簡144 大正八年四月 保阪嘉内あて

私のある友達が申しました。また私も申しました。

「なるやうになれ。どうでもなるやうになれ。流れる。流れる。」ひとりでに流れる力は不可抗です。たゞしこれからの流れやうはきめなければならぬ。

書簡152 a 大正八年七月 保阪嘉内あて

たゞ流れよ。流れよ。質屋の店には利欲と戦ひ、明るき社会の表に立ちては名誉と戦ひ、もはや私は私の性質が斯くなるを以て斯すれば最その長所を發揮すと考へるのはあきました。われは無盾自身なるが故に両極端の混合体なるが故に転々 戦ひ流る。流さる。

書簡158 大正八年十二月二十三日 保阪嘉内あて

この度はめでたく御入宮なされまして深く御祝申し上げます。私はすこしも変わりません。そしてまたひどく流れて変つてゐます。流れる流れないの問題ももうはるかに上流になつてしまひました。

大正七年の賢治は、盛岡高等農林学校の卒業を控え、進路、徴兵検査、信仰上の問題で父と対立していた。大正八年においても人造寶石の製造・販売を職業として考えていたが、父の同意を得るには至らず、将来について大いに悩んでいた時期であつた。書簡144の

宮澤賢治における〈流れ〉〈揺らぎ〉

「どうにでもなるやうになれ。流れる。流れる。」からは、半ば投げやりな気持が窺える。ここでの「流れ」は、自らの過去、現在、将来を指すもの、大きく「時間の流れ」として用いられているものなどさまざまの意味で「流れ」という言葉が登場する。「これからの流れやう」、「流れる流れないの問題ももうはるかに上流になつてしまひました」では、自分の現状と将来について「流れ」を用いて述べているが、「ひとりでに流れる力」、「たゞ流れよ。流れよ」、「またひどく流れて変つてゐます。」からは、自分の力ではどうすることもできない「時間の流れ」に戸惑っている様が窺える。

(二) 〈流れ〉に漂う生命

賢治が短歌制作を盛んに行っていた盛岡高等農林時代、太田水穂が多くくの歌論を発表している。その中の「万象の生意と詩人芭蕉の心」(大5・9)で太田水穂は、「生命の流れ」という言葉を用いて、次のように述べている。

自然界の現象は、たゞ単なる物の塊りでは無い。一木一草、一石一葩、皆尽く宇宙の生命と声息を通わしてゐる。(略)万物はそれさながら一つの大海である。一波万波互いに相脈拍して、断つべからず、切るべからず、汪洋蕩々として眞に「生命の流れ」たることを思はしめる。此の「生命の流れ」が形を

得て木となり、草となり、鳥となり、声となるのである。

これは、太田水穂が唱えた「万象愛」の核となる部分である。自然界の現象は単なる物の塊ではなく、一木一草、一石一葩すべてに生命がある。万物は大海であり、波となって脈拍し、生命の流れとなり、その流れがかたちとなったものが、草や鳥などの生命となる。また、「生命の海と万象の愛と心」（大8・5）では、次のように記されている。

この生命観は草木から土壤へ、土壤から大地へと拡がって行つて、果ては天地万物の上にもまで拡がって行く、さうして此の宇宙が吾等の心に一つの大きな生命の流れとなつて感じられて来る。この感じが深くなればなるに従つて、益々万物が自分に親しくなつて来る。自分もまた此の生命の流れのうちの一つの流れであると感じる時に、宇宙の生命の流れの測り知られぬ大きさを怖るゝと与に、自分の生命の小さく果敢ないことを知るのである。

「生命の流れ」が広がれば広がるほど、宇宙と一体化し、大きな流れの一部であると感じるようになる。そして、宇宙の生命の流れの大きさを知ることによって自分の生命の小ささを知ることになる。大きな生命の流れに自己を含めた生を見出す太田水穂の生命への眼差しが窺える。賢治にも同じく「流れ」と生命を結びつける表現が見ら

れる。しかし、大正七年以降の書簡では、晩年の文語詩まで連なる「流れ」に「修羅」意識を抱く賢治独自の視点を確認できる。

書簡84 大正七年九月三日 河本義行あて

私は又歩きはじめてゐます。今は毎日谷を上つてゐます。その谷の青びかりする水の中に白い蛾が貝細工の様になつて死んでゐたり、又からだ一杯露にぬれて廃坑の夕風にふるえたりしてゐるのです。

書簡89 大正七年十月一日 保阪嘉内あて

私の世界に黒い河が速にながれ、沢山の死人と青い生きた人とながれを下つて行きます。（略）あるものは怒りに身をむしり早やそのなかばを食ひました。溺れるものの怒りは黒い鉄の瓦斯となりその横を泳ぎ行くものをつゝみます。流れる人が私かどうかはまだよくわかりませんがとにかくそのとほりに感じます。

書簡84では、水の中で、死んだ「白い蛾」が漂い、同じ蛾か断定できないが、蛾が「廃坑の夕風にふるへ」る様が記される。書簡84で「流れ」に浮かぶのは死んだ蛾であったが、書簡89では、「黒い河」に「沢山の死人と青い生きた人」が「流れ」、怒りに身をむしり他の人を食べる凄惨な情景が記される。この書簡89を改作し短歌としたものが、「歌稿A」の「大正七年五月以降」に収めた十首の

短歌、「青びとのながれ」である。

- 680 あ、こはこれいづちの河のけしきぞや人と死びととむれながれたり
- 681 青じろき流れのなかを死人ながれ人々長きうでもて泳げり
- 682 青じろきながれのなかにひとびとはながきかひなをうごかすうごかす
- 683 うしろなるひとは青うでさしのべて前行くものあしをつかめり
- 684 溺れ行く人のいかりは青黒き霧とながれて人を灼くなり
- 685 あるときは青きうでもてむしりあふ流れのなかの青き亡者ら
- 686 青人のひとりにはやく死人のたゞよへるせなかをはみつくしたり
- 687 肩せなか喰みつくしされししにびとのよみがへり来ていかりなげきし
- 688 青じろく流るゝ川のその岸にうちあげられし死人のむれ
- 689 あたまのみひとをはなれてはぎしりし白きながれをよぎり行くなり

「青じろき流れ」の中には、「亡者」以外にも「生者」「青人」が渾然一体となり、苦しみ流れていく様が描かれる。ここでは、〈流

宮澤賢治における〈流れ〉〈揺らぎ〉

れ〉の中で「いかり」を感じながら生者と死者、青びとが争闘しあう修羅の世界そのものが捉えられるとともに、「春と修羅」につながる修羅意識の萌芽が窺える。689番歌には、「はぎしりし白きながれをよぎり行くなり」と「はぎしりし流れてゆく「ひと」が詠まれている。これは、詩「春と修羅」で、「四月の気層のひかりの底」を「はぎしりゆききする」存在である修羅と類似した表現が用いられている。前述したように修羅とは、「こうありたい」という感情とそれと矛盾する感情の中で苦悩し、分裂していく存在でもあった。689番歌の「はぎしりし」怒りながら、「あたま」が「ひと」から分裂していく様子は、分裂する修羅を表しているようにも捉えられる。書簡を初案として展開していく「青びとのながれ」は、修羅意識の萌芽を見出せるとともに、後の作品に受け継がれていく〈流れ〉の重要なモチーフを有している。

(三) 「イギリス海岸」関連作品群における〈流れ〉

大正七年から八年の書簡に頻繁に登場する〈流れ〉は、それ以降の書簡ではほぼ姿を現さなくなる一方、『春と修羅』第一集から第三集の中で確認することができる。しかし、特に象徴的に用いられていくのは、「イギリス海岸」と賢治が名付けた北上川を通底する風景を描いた作品群の中である。「青びとのながれ」もこの「イギ

リス海岸」に関連する作品群に位置づけられる。〈流れ〉に見出された「修羅」とは何を指すのか。「イギリス海岸」とは、岩手県花巻市に流れる北上川の西岸を指して賢治自身が命名した私的な名称である。生前未発表の歌曲「イギリス海岸の歌」に「修羅のなごさ」という言葉が見られる。

Tertiary the younger tertiary the younger / Tertiary the younger mud-stone / あをじろ日破れ あをじろ日破れ / あをじろ日破れにおれのかげ / Tertiary the younger tertiary the younger / Tertiary the younger mud-stone / なみはあをさめ 支流はそそぎ / たしかにここは修羅のなごさ

「Tertiary the younger」は「第三紀初期」「mud-stone」は「泥岩」を意味する。つまり、「第三紀初期 第三紀初期 / 第三紀初期の泥岩」となり、「イギリス海岸」岸辺の泥岩から地質時代の第三紀を思い起こしている。その青白い泥岩にひびが入り、自分自身の影が映っている。そして、北上川の「あをさめ」た波が打ち寄せ、支流である猿ヶ石川がそそぐ。「あをじろ」や「あをじろ日破れにおれのかげ」のように「あをじろ」いものの中に生命を見出す描写は「青びとのながれ」における青じろい流れの中を漂う人々の表現と共通する。なぜ賢治は「イギリス海岸」を「修羅の渚」と呼ぶに至ったのか。

賢治が花巻農林高等学校時代に生徒を連れて北上川の河岸を訪れた様子を描いた「イギリス海岸」（生前未発表）では次のように述べられている。

イギリス海岸には、青白い凝灰質の泥岩が、川に沿ってずるぶるん広く露出し、その南のはじめに立ちますと、北のはづれに居る人は、小指の先よりもっと小さく見えました。（略）それに実際そこを海岸と呼ぶことは、無法なことではなかったのです。なぜならそこは第三紀と呼ばれる地質時代の終り頃、たしかにたびたび海の渚だったからでした。（略）この百万年昔の海の渚に、今日は北上川が流れてゐます。昔巨きな波をあげたり、ちっと寂まったり、誰も誰も見えない所でいろいろに変わったその巨きな鹹水の継承者は、今日は波にちらちら火を点じ、びたびた昔の渚をうちながら夜昼南へ流れるのです。

「イギリス海岸の歌」でも、岸辺の泥岩から地質時代が想起されているように、賢治にとって「イギリス海岸」とは、地質時代を思い起こさせるものであった。そして、「海の渚」に「流れ」る北上川は、動物たちが争闘しその化石が堆積した太古からの大きな時間の〈流れ〉を内包しながら流れている。生と死が分裂しながらも同じ空間に共存するこの場所は、「青びとのながれ」の生者と死者が混在し川を流れていく情景と一致する。賢治が「イギリス海岸」に

見た修羅とは、地質時代からの争闘の上に現在の生が混在し（流れ）ていく様である。

書簡、短歌、歌曲、童話と共通して描かれた「イギリス海岸」の〈流れ〉は、晩年の文語詩未定稿「ながれたり」の中にも見ることができ^⑥。「ながれたり」では、「げにながれたり」という言葉が何度も繰り返される。そこには、「青ざしめし人と屍」のように「青びとのながれ」の「青人」や「死人」と類似したものが〈流れ〉ている。また、「青びとのながれ」と同様、「お、頭ばかり／きりきりきりとはぎしりし／流れを切りてくるもあり」と「頭」と身体が分裂して「はぎしり」して〈流れ〉ていく様を描かれ、修羅を表すような存在も確認できる。

太古からの生と死を内包して〈流れ〉る場所に修羅を見出す「イギリス海岸」関連作品群であるが、同じ作品群に属する文語詩五十篇「川しろじろとまじはりて」では、北上川を見て想起された恋愛感情から修羅を見出している。「川しろじろとまじはりて」は、三回の推敲がなされており、下書稿（一）と下書稿（二）では、「イギリス海岸の歌」と同様の「修羅の渚」という言葉が見られる。下書稿（一）では、「きみ来ることの／よもなきを知り」と「きみ」という人物を待っているが来ない悲しみが描かれ、下書稿（二）では、「磐に落ちて／あゝきみの影すくよかに／こゝはも修羅の渚な

り」と、盤に「きみ」の影を見て、「修羅の渚」と称している。賢治の修羅意識は、前述したように感情の分裂・矛盾による苦悩であり、恋愛感情による葛藤もその一つであった。賢治にとって生あるものの争闘を象徴する修羅であった「イギリス海岸」は、晩年の文語詩の中では恋の苦悩を表す修羅としても捉えられている。

このように、大正七年の書簡から登場しはじめた〈流れ〉は、短歌「青びとのながれ」を経て、文学活動の初期から晩年に至るまで幅広く確認することができる。そしてそれは、特に「イギリス海岸」作品群においては、北上川の太古からの生と死を内包した〈流れ〉や恋の苦しみを想起させる〈流れ〉によって、修羅意識を抱かせるものであった。

二 〈揺らぎ〉への執着

（一）植物の〈揺らぎ〉

〈流れ〉と同様に〈揺らぎ〉も文学活動の始まりから晩年まで多用されている。植物が風に吹かれ揺れる様は波の揺らぎを連想させるものとして描かれてきた。

・縮れて雲はきらきら光り／とんばは萱の花のやうに飛んで

ある／萱の穂は満潮／萱の穂は満潮」

（「第四梯形」、『春と修羅』第一集「風景とオルゴール」所収）

・……建物中の玻璃ガラスの窓が／みんないちどにがたがた鳴って／
林はまるで津波のやう……

〔三〇五その洋傘だけでどうかなあ』『春と修羅』第二集所収〕

・江釣子森の脚から半里／荒さんで甘い乱積雲の風の底／稔つた稲や赤い萱穂の波のなか／そこに鍋倉上組合の／けらを装った年よりたちが／けさあつまつて待つてゐる

〔七四〇 秋』『春と修羅』第三集所収〕

そして、〈波立ち〉〈揺らぐ〉植物は、感情と結びつけられて描かれていく。

60 灌木のかれ葉赤き実かやの穂の銀にまぢりて風に顫ふか。

〔歌稿「B」明治45年4月〕

178 風ふけば／草の穂なべてなみだちて／汽車のひゞきの／なみだぐまじき。

〔歌稿「B」大正3年4月〕

602 白雲の種山ヶ原に燃ゆる火の／けむりにゆらく／さびしき草穂。

〔歌稿「B」大正6年7月〕

60番歌で「風に顫ふ」だけであった「穂」は、178番歌以降より感情とともに詠まればじめる。178番歌では、「草の穂」が「なみだ」の様子に共鳴して、「汽車のひゞき」に涙を誘われ、602番歌では「けむりにゆらく」「草穂」が「さびしさ」という感情に結びつけられる。詩や童話作品にも感情と〈揺らぎ〉のつながりが確認できる。

がさがさした稲もやさしい油緑に熟し／西ならあんな暗い立派な霧でいつばい／草穂はいちめん風で波立つてゐるのに／可哀さうなおまへの弱いあたまは／くらくらするまで青く乱れ／いまに太田武か誰かのやうに／眼のふちもぐちやぐちやになつてしまふ

〔「宗教風の恋」、『春と修羅』第一集所収〕

しばらくあるきださないでくれ／じぶんだけせつかく待つてゐても／用がなくてはこまるとおもつて／あんなにぐらぐらゆるめるのだ／（青い草穂は去年のだ）／あんなにぐらぐらゆるめるのだ

〔「小岩井農場パート七」、『春と修羅』第一集所収〕

樺の木はもうすっかり恐くなってぶりぶりゆれまじた。土神は歯をきしきし噛みながら高く腕を組んでそこらをあるきまはりました。

〔「土神ときつね」

「宗教風の恋」小岩井農場パート七〕では、それぞれ苦悩、葛藤、不安などという感情の〈揺らぎ〉と草穂の〈揺らぎ〉が重ねて描かれている。「土神ときつね（生前未発表）では、擬人化された「樺の木」の怒りが〈揺らぎ〉で表現されている。このように、植物の〈揺らぎ〉は、不安、寂しさ、怒りなどの感情を表現するものとして用いられている。しかし、人間以外のものが声を持つ童話作品において、〈揺らぎ〉はまた違った機能を有するようになる。

(二) 童話作品における〈揺らぎ〉と「まことのことは」

「鹿踊りのはじまり」(『注文の多い料理店』所収、大正13・12・

1、杜陵出版部)では、次のような箇所が見られる。

そのとき西のざらざらのちぢれた雲のあひだから、夕陽は赤くな、めに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のやうにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてゐた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行はれてゐた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。(略)

嘉十にはかに耳がきいんと鳴りました。そしてがたがたふるえました。鹿どもの風にゆれる草穂のやうな気もちが、波になつて伝はつて来たのでした。(略)

北から冷たい風が来て、ひゆうと鳴り、ほんの木はほんたうに砕けた鉄の鏡のやうにかゞやき、かちんかちんと葉と葉がすれあつて音をたてたやうにさへおもはれ、すすきの穂までが鹿にまちつて一しよにぐるぐるめぐつてゐるやうに見えました。

(略)

鹿はおどろいて一度に竿のやうに立ちあがり、それからはやてに吹かれた木の葉のやうに、からだを斜めに逃げて出しました。銀のすすきの波をわけ、かゞやく夕陽の流れをみだし

宮澤賢治における〈流れ〉〈揺らぎ〉

てはるかにはるかに通けて行き、そのとほつたあとのすすきは静かな湖の水脈のやうにいつまでもざらざら光つて居りました。(略)

それから、さうさう、苔の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすすきとほつた秋の風から聞きたいのです。

「わたくし」は、西から吹く「秋の風」から「嘉十」をめぐる物語を伝え聞くが、その際、西風によつて野原のすすきは「白い火のやうにゆれて光」り、「すすきをゆらす風」は徐々に人のことばに聞こえてくる。「嘉十」は「鹿ども」の声が聞こえるようになるが、その描写も「鹿どもの風にゆれる草穂のやうな気もちが、波になつて伝はつて来たのでした。」と、「わたくし」と同様に、人外のものからの「ことば」は、〈揺らぎ〉によつて生み出され、伝わってくる。

「鹿踊りのはじまり」では、草穂の〈揺らぎ〉が鹿たちの気持ちを感じるが、「サガレンと八月」(生前未発表)では、押し寄せる波自体が言葉をもつて現れる。

そしたら俄かに波の音が強くなつてそれは斯う云つたように聞こえました。「貝殻なんぞ何にするんだ。そんな小さな貝殻なんど何にするんだ、何にするんだ。」

「おれは学校の助手だからさ。」私はいままたつりこまれてどな

りました。するとすぐ私の足もとから引いて行った潮水はまた巻き返して波になってさっとしぶきをあげながら又叫びました。「何にするんだ、何にするんだ、貝殻なんぞ何にするんだ。」私はむっとしてしまひました。(略)

すると波はすこしたちろいだようからつばな音をたて、からぶつぶつ眩くやうに答へました。「おれはまた、おまへたちならきつと何かにしなけあ済まないものと思つてたんだ。」

「サガレンと八月」は、前半部と後半部に分かれており、後半は童話「タネリはたしかに一日囁んでゐたやうだつた」の先行作品として注目されてきた。前半部分は、「オホーツク海のなぎさに座つて(略)西の山地から吹いて来たまだ少しつめたい風」と、標本集めに内地からやつて来た自称農林学校の助手との対話から始まる。風との対話の後、潮水は打ち寄せる度に波となり、その波が「助手」に話しかけてくる。助手は、風と波たちとの会話を振り返つて、「ただそこ」から風や草穂のいい性質があなたがたのころにうつつて見えるならどんなにうれしかしれません。」と、「風や草穂」との会話を「いい性質」と捉えている。

また、『注文の多い料理店』「序」では、人間以外のものから「わたくしたち」が得るものを、「きれいなたべもの」「すきとほつたほんたうのたべもの」と呼ぶ。

わたしたちは、氷砂糖をほしくらゐるもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。(略) わたくしは、さういふきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。(略) けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾されかがおしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。

「サガレンと八月」の「いい性質」や、「鹿踊りのはじまり」『注文の多い料理店』「序」で用いられる「ほんたうの精神」「きれいなたべもの」「ほんたうのたべもの」とは何を意味し、なぜ享受することが願われるのか。これらは、「春と修羅」の中で、喪失により自己を「修羅」と呼ぶ要因となつた「まことのことば」(「春と修羅」と同義である)と考える。「はじめに」でも触れたが秋枝氏は、「まことのことば」の発生を、「現実の肉體性を超越した本来的な生命の発露といつたもの」と一体化することだと指摘する。修羅とは分裂し矛盾し苦悩する存在である。その一方で、風や草穂、波は分裂しない「きれい」で「すきとほつた」「本来的な生命」であり、修羅とは対極に位置する。そのような「本来的な生命」から発せら

れた「いい性質」、「ほんたうの精神」や「ほんたうのたべもの」を享受することは、失われた「まことのことば」を獲得し修羅を克服する可能性につながる。そして、「揺らぎ」というモチーフは、それらの性質を届けたり言葉を生み出すことで、「まことのことば」を享受させる重要な機能を果たしていると考えられる。

(二) 「農学校もの」における〈揺らぎ〉

賢治は、大正一〇年から大正一五年の間、花巻農学校の教員として勤務している。「イギリス海岸」もこの間の出来事が描かれた作品である。教師時代の授業の様子などを描いた作品群は「農学校もの」と呼ばれる。「農学校もの」でも〈揺らぎ〉が象徴的に現れている。その一つである「台川」は、賢治が農学校教師をしていた時の野外学習の風景を記した文章である。台川とは花巻の西郊外の山麓にある、現在の花巻温泉の横手を流れる谷川で、この上流に台温泉がある。比較的深い谷間を流れる台川は、下流で瀬川と合流し、やがてイギリス海岸辺りで北上川に注ぐ。「台川」(生前未発表)では、〈揺らぎ〉によって生命の躍動や喜びが表現されている。

たしかに光がうごいてみんな立ちあがる、腰をおろしたみぢかい草、かげらふか何かゆれてゐる、かげらふぢやない、網膜が感じたゞけのその光だ、(略) 木の青、木の青、空の雲は今日

宮澤賢治における〈流れ〉〈揺らぎ〉

も甘酸っぱく、足なみのゆれと光の波。足なみのゆれと光の波。(略) ゆれてるゆれてる。光の網(略) 日光の波日光の波、光の網と、水の網。
光と結びつくと、〈揺らぎ〉は生きていることの喜びを全身で感じているような表現となる。

次に、「イーハトーボ農学校の春」(生前未発表)は、春の躍動をあらわす「太陽マヂツクのうた」を感じながら、肥溜から下肥を汲み、実習地の麦畑に運搬し、施肥をする農学校の作業を描いた作品である。

ほんたうに光炎菩薩太陽マヂツクの歌はそらにも地面にもちらいらいっばい、日光の小さな小さな葦や橙や赤の波といっしょに一生けん命に鳴つてゐます。(略) 楊の木の中でも樺の木でも、またかれくさの地下茎でも、月光いろの甘い樹液がちらちらゆれだし、早い萱草やつめくさの芽にはもう黄金いろのちいさな澱粉の粒がつうつう浮いたり沈んだりしてゐます。(略) くづれかかった煉瓦の肥溜の中にはビールのやうに泡がもりあがっています。さあ順番に桶に汲み込もう。そこらいつばいこんなにひどく明るくて、ラヂウムよりもっとはげしく、そしてやさしい光の波が一生けん命一生けん命ふるえているのに、いったいどんなものがきたなくてどんなものがわるいのでしょうか

か。(略) まぶしい山の雪の反射です。わたくしがはたらきながら、また重いものをはこびながら、手で水をすくふことも考へることのできないときは、そこから白びかりが氷のやうにわたくしの咽喉に寄せてきて、こくつとわたくしの咽喉を鳴らし、すっかりなほしてしまふのです。(略) わたくしたちが梧桐で肥を麦にかければ、水はどうしてそんなにまだ力も入れないやうに水銀のやうに青く光り、たまになつて麦の上に飛びだすのでせう、また砂土がどうしてあんなにの乾いた子ども水を呑むやうに肥を吸ひ込むのでせう。もうほんたうにさうでなければならぬから、それがたゞひとつのみちだからひとりでどんどんさうなるのです。(略) 楊の木でも樺の木でも、燐光の樹液がいっばい脈をうつつてゐます。

「イーハトーボ農学校の春」では、太陽の光のもとで喜びに満ちた生命が描かれ、生きることの喜びにあふれた世界では「肥溜」さえも美しいものとされる。そして、一生懸命躍動する生命が「光」や「樹液」の〈揺らぎ〉によって表現されている。また、「山の雪の反射」の「白びかり」が「わたしの咽喉」を「なおしてしまふ」など、「光」が回復の象徴として描かれている。さらに、柄杓で肥を麦にかける様子に幸せに満ちた感想を抱き、「ほんとうにそうでなければならぬから、それがただひとつのみちだから」と述べられる。

「台川」「イーハトーボ農学校の春」では、「鹿踊りのはじまり」や「サガレンと八月」のように、人間以外のものの言葉を直接享受することはない。しかし、〈揺らぎ〉により生じる生命の喜び美しさは、「本来的な生命の発露」を感じさせるものである。「農学校もの」で描かれた「ただひとつのみち」と称されるような生命の躍動は、童話作品や「春と修羅」で語られた、「いい性質」や「ほんたうの精神」「まことのことば」に通じ、言葉を介するよりも直接的に生命自体を享受させている。童話作品と同様に、「農学校もの」における〈揺らぎ〉も、修羅を克服させる機能を有していると考え

おわりに

宮澤賢治は、短歌、詩、童話、文語詩を通して、〈流れるもの〉〈揺らぐもの〉を多用した。〈流れ〉と〈揺らぎ〉のモチーフは、両者とも文学活動初期の短歌から晩年の文語詩に至るまで幅広く確認することができる。特に、「イギリス海岸」や「農学校もの」など、花巻農学校の教員時代に執筆したと思われる作品もあり、〈流れ〉と〈揺らぎ〉は時期に関係なく並行して用いられたモチーフのようだ。しかし、詩「春と修羅」で失われた「まことのことば」を再び獲得する〈揺らぎ〉の修羅意識の克服という機能については、『注

文の多い料理店」「序」やその他の童話作品、「農学校もの」で確認できたように、散文の中で多く用いられていると考える。

そして、「流れ」と「揺らぎ」は両者とも修羅意識と深く関わっているがその機能は異なる。「流れ」は、北上川を描いた「イギリス海岸」関連作品において、生き物が争闘しあつた太古からの生と死の堆積、恋愛感情の苦悩などを想起させ、修羅意識自体を抱かせる。そして「揺らぎ」は、風や植物、波など人間以外のものに言葉を与え、生命の躍動や喜び、よい性質を届けるものである。これらの生を享受することは、「春と修羅」で失われた「まことのことば」の獲得、修羅意識の克服につながる。以上のように、「流れ」と「揺らぎ」は、修羅意識の自覚、修羅意識の克服という機能を有する表現であると位置づけられる。

注

- ① 秋枝美保「宮沢賢治「修羅」における表現意識の分裂とその克服——童話「土神と狐」を中心に——」（『比治山女子短期大学紀要』28、平5・3）
- ② 見田宗介『20世紀思想文庫12 宮沢賢治——存在の祭りの中へ』第一章・自我という罪、六一頁～一二二頁（昭59・2・29、岩波書店）
- ③ 小野隆祥「宮沢賢治の思索と信仰」第二部・宮沢賢治の思索——修羅の自覚と刹那滅の克服、一一五頁～一二二頁（昭54・12・15、泰流社）
- ④ 大正四年創刊の「潮音」で多くの歌論が発表された。一九一〇年代の

宮沢賢治における「流れ」「揺らぎ」

歌論は後に『短歌立言』（大10・4・1、岩波書店）に収められている。

- ⑤ 「【新】校本宮沢賢治全集第十六卷（下）補稿・資料年譜編」では、「九月三日（火）花巻より学校の河本義行にあてた葉書（書簡84）」に、「私は又歩きはじめてゐます。今は毎日谷を上つてゐます。」という。「その谷の青びかりする水の中に白い蛾が貝細工の様になって死んでゐたり、」という一節は、短歌「大正七年五月以降」中の「青びとのながれ」（歌稿「A」680～689）を連想させる。」と指摘されている。
- ⑥ 「青びとのながれ」と「ながれたり」の関連は、宮澤清六「兄のトラソク」第二章「イギリス海岸」への告白、一四八頁～一六六頁（平3・12・4、筑摩書房）や小沢俊郎「アルビヨンの夢と修羅の渚——賢治地理「イギリス海岸」——」（『四次元』13—4、昭36・4）、飛高隆夫「詩（ながれたり）考（文語詩未定稿から）」（『国文学 解釈と教材の研究』23—2、昭53・2）らが指摘している。
- ⑦ ①に同じ。
- ⑧ 金子民雄「『台川』の項」一〇五頁～一〇六頁（渡部芳紀編『宮沢賢治大事典』（平19・8・10、勉誠出版）

〔付記〕 本稿で引用した宮沢賢治の文章は『【新】校本宮沢賢治全集』全十六巻・別巻一（平8・3・25～平21・3・10、筑摩書房）を底本とした。引用に際しては、ルビを簡略化し、漢字は原則として新字体に改めた。／は改行を表す。